琉球大学学術リポジトリ

自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 自閉症, 愛着, コミュニケーション, 情動, 対人関係, 鏡像反応 キーワード (En): autistic children, communication, emotion, interpersonal relatedness, mirror response 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9107

＜ 研 究 4 ＞

自閉症児における対人関係の変遷と鏡像反応の関連について

神　園　幸　郎

Relationship between Changes of Interpersonal Relatedness and Mirror Responses in Children with Autism

Sachiro KAMIZONO

本研究では、自閉症児と養育者の遊び場面の縦断的観察を通して、対人関係の発達的変化と鏡像反応の特徴を調べた。対象児の年齢が４歳３ヵ月から７歳０ヵ月までの約２年半にわたる観察期間は、対人関係の質的違いによって６つの時期に区分された。本児は第５期において、遊び相手である養育者の心の状態の理解に加えて、本児自らの内的状態を理解できるようになったことによって、養育者との相補的な関係性のもとで遊びを展開できるようになった。丁度この時期に、鏡像反応は以前の身体の連動性への注目に代わって、自己の情動表現への注目が多くなった。このことは、自･他認知を基盤とする対人関係の変化が、鏡像反応にきわめてよく投影されることを物語っている。このことはまた、鏡像反応の特徴を見極めることによって、自閉症児における対人関係の様相を予測できる可能性を示唆するかもしれない。

はじめに

近年、自閉症研究は1970年以降、主流をなしていた認知･言語障害説に代わって、いわゆる「カナーへの回帰」(野村、1992) と称されるように、かつてのKanner(1943)の主張と同様に、社会性障害を一次障害とみなす研究が大きな流れを形成するようになってきた。また、自閉症児における社会性障害を包括的に説明する枠組みとして、Baron-Cohen, Leslie & Frith (1985)の「心の理論」欠如仮説が登場するに至って、自閉症児の社会性障害に関する研究は飛躍的に前進した。最近の研究によれば、自閉症児が「心の理論」を獲得できない背景には、ジョイント・アテンション、摸倣、さらには共感の欠如などにみられる発達初期の社会的コミュニケーション行動の劣弱性が存在するとの指摘がなされるようになってきた。最近の自閉症研究は、その焦点が「心の理論」の獲得過程に移ってきている。

ところで、ジョイント･アテンションや共感などは、いずれも自己と他者の分化と自己・他者認識を基盤として成り立っている。したがって、「心の理論」の起源は発達初期の自他

分化や自己・他者認識の獲得過程にまで遡ることができる。それ故に、自閉症児の社会性障害の本質を理解するためには、彼らの自己認識および他者認識の水準やその特徴の把握は避けて通れない重要な課題である。

従来から自己認知の発達を明らかにしようとする研究の中で、自己の鏡像に対する反応を指標として、自己認識の成否を捉えようとする研究が行われてきた。こうした研究の枠組みに基づいて、自閉症児の鏡像認知についてもいくつかの研究がなされている。これらの研究の多くは、Gallup(1968, 1970, 1977)の研究で用いられたマーク課題（別名、ルージュ課題）に基づいている。この課題では、実験者は対象児の顔の一部に口紅（ルージュ）やアイシャドウを気づかれないようにして塗り、その後、鏡を見せたときに対象児がどのような反応をしたかによって、鏡の中の視覚的自己像を認知できているか否かを調べるというものである。鏡の視覚的自己像を見て、マークされた顔の部位に手を持っていき拭き取るような反応をした場合には、視覚的自己認知が成立していると判定されるわけである。自閉症児を対象とした実験の結果（Newman & Hill, 1978; Spiker &Ricks, 1984; Dawson & Mckissick, 1984）によれば、自閉症児でも鏡像の自己認知が成立することがわかっている。しかしながら、Dawson & Mckissick (1984)によれば、鏡の中の自己像を見たときに健常児が示す「恥じらい」や「ふざけ」のような自己を意識した行動を自閉症児はまったく示さないことが指摘されている。視覚的自己認知は成立するものの自己意識行動が出現しないという自閉症の鏡像反応の特徴について、別府（2000）は自己像を見て他者が感じる心の内容を理解することが難しいという他者の心の理解に関する障害との関連で言及している。

しかしながら、自閉症児の多くがマーク課題において視覚的自己認知が成立するものの、自己意識行動が出現しないという事実が何を意味するのかについては、いまだ実証されているわけではなく、依然として推測の域を脱していない。いずれにしても、これらの事実は、自閉症児においては視覚的自己像の認知が必ずしも自己認知の完全な成立を意味しているのではないことを物語っている。

自閉症児の自己・他者認知の実相を把握するためには、自己･他者認知の成立を発達的に捉える必要がある。麻生（1980）は他者理解を「情動反応としての他者理解」、「振る舞いとしての他者理解」、「感情移入としての他者理解」、そして「概念的他者理解」の４つの水準を設けて発達的に記述している。自閉症児における視覚的自己像の認知は、自己認知における一定の水準を表していることは確かあるが、先にも指摘したように自己認知の成立を必ずしも意味しているわけではない。したがって、視覚的自己像の認知が成立するまでの過程はもとより、視覚的自己認知が成立した後の鏡像反応を追跡し、発達に伴なう自己認知の水準の変化を明らかにする必要がある。

また、マーク課題においては自閉症児にとって新奇で非日常的な実験場面での行動を分析の対象としている点で、彼らの自己・他者認識の実相を捉えきれているかどうかという疑問が残る。したがって、顔面だけを対象とするマーク課題を超えて、日常的な場面において広く鏡に対する反応、いわゆる鏡像反応を捕捉し，分析する必要がある。

自閉症児における自己･他者認識の発達的特徴を探るためには、最も身近な他者である養育者との相互交流場面における行動から両者の関係性の変遷を縦断的に追跡することが有効である。一般に、自閉症児は見知らぬ他者（ストレンジャー）よりも養育者に接近―探索行動を示し、このことは精神年齢が等しい知的障害児や健常児と同じであることがわかっている（山上、1999; Sigman & Ungerer, 1984; Shapiro, Sherman, Calamari, & Kotch, 1987; Caps, Sigman, & Mundy, 1994; Rogers,

Ozonoff, Maslin-Cole, 1991, 1993)。さらに、自閉症児と養育者との愛着関係は発達とともに質的に変化することが明らかになっており、こうした対人関係の質的変遷は、彼らの自己・他者認識の発達的変化を基盤としていることも指摘されている（別府、1994；山上、1999；神園，2000，2001)。

自閉症児の愛着関係が発達的に質的な変遷を遂げ、それに伴なって彼らの自己･他者認識の水準が変化するのであれば、そのことを投影するように鏡像反応も同様に質的な変化を示すことが予想される。

そこで、本研究は自閉症児とその養育者との相互交流場面における両者の行動の観察を通して、両者の愛着関係の質的変遷について縦断的に追跡する。そして、自閉症児と養育者との交流場面で出現した自閉症児の鏡像反応について先に指摘したように自己認知の水準を想定しつつ、顔だけに焦点化しないより全般的な鏡像反応についてその特徴を明らかにする。その上で、自閉症児とその養育者との愛着関係の質的な変遷と鏡像反応の特徴との関係性を検討することによって、自閉症児が示す鏡像反応の意味を解明する。

方法

1．対象児のプロフィール

対象児は 199×年生まれの女児である．父 20 歳と母 20 歳の第一子として生まれた．本児は在胎 36 週の早産で，生下時体重は 2100 g であった．黄疸のため保育器に５日間入った．定頸３カ月、始歩 10 カ月で乳児期前半の発育は特に問題はなかった．１歳 6 カ月児健康診査において言葉の遅れと多動を指摘された．２歳 6 カ月になって公的な療育機関の医師から自閉症と診断さた．その後，その療育機関で週１回の割で言語訓練と療育訓練を受けた．３歳 4 カ月頃から，「抱っこ」「氷」などの要求の言葉が出はじめた．絵本にも興味を示し，母親が読み聞かせをすると，気に入った部分だけを模倣するようになった．両親が共働きのため，２歳の頃から保育園あずけられたが集団に馴染めず，園側から拒否された．そのため，２歳半から別な保育園に通いはじめるが，約１年の後その園でも同様な理由で拒否された．そして，3 歳 4 カ月になって公立の保育所に障害児保育の該当児として入所した．入所当初は各保育室や事務室を歩き回り，部屋の照明，電話，電気ポット，扇風機などのスイッチやキーボードを操作するといった行動が頻繁にみられた．しかし，保育所の環境に慣れるにつれて，担当の保育士とも目が合うようになり，表情が豊かになった．遊びは専ら一人遊びで，紐通しや型板はめなどに熱中した．本児の一人遊びに他児が加わってくると，途端にその場から立ち去り関わりを避けた．遊びの順番などにこだわりがあり，それが崩されるとパニックを起こすこともあった．言葉は反響言語がほとんどあったが，場や状況に合った言葉も僅かであるが出現していた．保育所に入所して１年が経過する頃には排泄も自立し，保育所の日課を一通りこなせるようになった．本児が保育所生活の２年目を目前にした４歳３カ月から，本研究の観察が開始された．本児は保育所に２年間通所した後，公立の幼稚園に１年間通園し、現在、知的養護学校の小学部２年生に在学している．観察は現在も継続中であるが，本研究では本児が 4 歳 3 カ月から 7 歳 0 カ月までの約 2 年半を分析対象とした。観察開始に先立って実施された新版Ｋ式発達検査における全領域の発達指数は 57 であった．

2．手続き

1）親子関係の観察

対象児とその親は２週間に１回の割で筆者が所属する大学に通ってきた。最初に対象児と親、そして筆者と本事例を担当する学生２

名で約10分程度の茶話会を持った。子どもの様子が落ち着いたところで、プレイルームに移動した。まず、対象児と親がプレイルームで遊具や玩具を使いながら自由に遊ぶ時間を設けた（以下、親子遊び場面と略す）。本児例の観察を始めて約1年間は両親がそろって親子遊び場面に参加することが多かったが、2年目以降は父親の仕事の都合で父親が参加できなくなり、母親だけが参加する母子遊び場面になった。本研究で分析対象とされた1999年3月から2001年9月までに実施された50回のセッションのうち、親子3人でのセッションが14回、父子が4回、母子が32回であった。この親子遊び場面の様子は同室する撮影者によって約30分にわたってVTRに収録された。次に親と特定の他者（学生）が入れ替わり、対象児と特定の他者との自由遊びの場面（他者遊び場面と略す）が設定される。他者遊び場面も同様に撮影者によって約30分間，VTRに収録された。VTR資料はトランスクリプトされ、分析の資料として利用された。なお、本研究では親子遊び場面だけを研究対象とした。

2）鏡像反応の抽出

1999年3月から2001年9月までの2年半の間に行われた50回の親子あそび場面のVTR資料の中から、対象児が鏡像に注目した場面を抽出し、DVDレコーダーに収録した。このようにして抽出された鏡像場面は、延べ795場面にわたった。1場面あたりの持続時間はほとんどが数秒以内であり、10秒を超える場面はきわめて少なかった。

3．分析方法

1）親子関係の分析

分析は特定の他者となる学生と撮影担当の学生それに筆者の3名によって行われた。親子遊び場面と他者あそび場面を、遊びの全体的な特徴，親および特定の他者への対象児の愛着行動、そして対象児の行動特徴などの視点で3名の分析者がそれぞれ独自に分析した。そして、それぞれの分析結果を持ち寄り、3名の合議のもとで分析結果を集約して当該セッションの記録とした。これらの記録資料のうち親子遊び場面の資料に基づいて本研究は行われた。

表1　鏡像反応のカテゴリー

視線対象	運動・動作	対象
自己	モノの操作	モノのみ
		自己
		自己とモノ
	意図的動作	全身
		顔
		顔以外の身体部分
	自然な動作	全身
		顔
		顔以外の身体部分
	静止	全身
		顔
		顔以外の身体部分
他者	モノの操作	モノのみ
		自己
		自己とモノ
	意図的動作	全身
		顔
		顔以外の身体部分
	自然な動作	全身
		顔
		顔以外の身体部分
	静止	全身
		顔
		顔以外の身体部分

2）鏡像反応の分析

収録された795回の鏡像反応を表1に示した自作のカテゴリーに基づいて分類した。まず、対象となる鏡像が自己および他者（親）のいずれであるかを分類した。さらに、自己と他者の鏡像のそれぞれについて、どのような運動もしくは動作がなされているかという観点で以下の4種類に分類された。「モノの

操作」は縫いぐるみ、シャボン玉遊びの道具、三輪車などの玩具や遊具を操作しているときに出現した鏡像反応である。「意図的動作」はお遊戯の動作を再現したり、ポーズをとったり、あるいは喜怒哀楽の表情を再現したりといったように，顔や身体を意識的に動かしているときの鏡像反応である。「自然な動作」は歩いたり，走ったり，立ち上がったりなど、動作そのものに意識を集中していないときの鏡像反応である。そして、「静止」は身体が静止しているときに出現する鏡像反応を指している。以上の４つのカテゴリーにつき、視線の対象が何に向いているかによって、次に示すそれぞれ３つの下位カテゴリーを設定した。「モノの操作」については、「モノ」あるいは「自己」だけに視線が向いているか、「モノと自己」の両方に向いているかによって下位分類された。「意図的動作」、「自然な動作」そして「静止」のそれぞれについて、「全身」に視線が向いているか、あるいは「顔」もしくは「顔以外の身体部分」に向いているによって下位分類された。収録されたすべての鏡像反応が表１に示した24のカテゴリーに分類された。

分類は筆者と本事例を担当した２名の学生の計３名によって行われた。それぞれの分類者は独自に795回の鏡像場面を上記の24カテゴリーに分類した。３名の分類者の分類結果が一致した割合は84パーセントであった。なお、分類が一致しなかった鏡像反応については、３名で協議の上，分類を特定した。

結果と考察

１．親子関係の変遷

対象児の年齢が４歳３ヵ月から７歳０ヵ月までの２年９ヵ月間に実施された50回のセッションの観察記録について、親子の関係性に焦点化して分析を行った。その結果、対象とした観察期間は関係性の質の違いによって、表２に示した６つの時期に区分された。それぞれの時期の特徴について、以下に記述した。

表２　各時期における関係性の特徴

時　期	セッション	関係性の特徴
第１期	１回～４回	道具的対象としての父親への接近
第２期	５回～15回	心理的安全基地としての母親への愛着
第３期	16回～24回	遊びの対象としての母親への志向性の芽生え
第４期	25回～34回	母親の内面性の気づきとそれへの働きかけ
第５期	35回～40回	自己の内面性の気づきと相補的関係性の成立
第６期	41回～50回	環境変化による情緒的不安定

第１期：道具的対象としての父親への接近

初回のセッションで初めてプレイルームに入ると戸惑っている父母とは対照的に本児はすぐに遊具棚に向かい、数種類の遊具に手を伸ばした後、モンテッソリ教具のペグさしを取り出し遊びはじめた。順番どおりペグをはめ終ると，次に型板はめに移るといったように、本児は形や大きさなどのマッチングを要する遊びに熱中した。この間、父親は本児に寄り添い、「ピンポーン」「ブー」などと声をかけていたが、母親は父子の位置からは少し離れたところから傍観的に眺めているだけであった。

父親は本児のひとり遊びが一段落するのを待って、本児を運動遊びに誘った。それらの運動遊びは，本児の身体を高く持ち上げる「高い高い遊び」、「くすぐり遊び」、そして「トランポリン遊び」などであった。本児は父親の行う運動遊びに興じて、笑顔やダイナミックな身体運動を表出した。当初は父親の側からの誘いかけに本児が応じるという形でのやり取りであったが、そのうち本児自ら父親の手をとりトランポリンに誘うことがたびたび出現するようになった。

神園(2000)は自閉症児が他者とトランポリン遊びを経験することによって、両者の心理

的関係が急速に接近することを指摘し、その要因として跳躍の同期性、身体動揺から生起する両者の身体接触、そして視覚的見えの共有と身体の姿勢の共有、などから醸成された一体感が大きく作用していると主張した。つまり、トランポリンを一緒に跳ぶことによって自閉症児と他者にある種の一体感が醸成され，身体動揺に伴う快の情動が両者に共有されるようになり、そのことが両者の心理的距離を接近させたのであろうというのである。

本児の父親に対するトランポリン遊びの要求行動にも神園（2000）が指摘した背景を想定できるであろうか。結論から言えば、否定的である。それは以下に指摘するような理由による。本児から父親にトランポリン遊びを要求する頃になると、本児による父親の誘い方やトランポリン上での父子の跳躍姿勢（両者は同一方向を向き、父親が本児の肩をつかみ、身体を密着して跳ぶ）などが常に同一であり、父子のトランポリン遊びはパターン化の様相を深めてきた。それに伴って、本児はトランポリンの跳躍中に目を閉じることが多くなったり，壁の大鏡に映る自己の鏡像を凝視し自己の運動と鏡像の連動性に注意を向けるといった行動が顕著になってきた。これらの行動は本児の関心が身体の浮遊感や視覚的見えの変化など，いわゆる自己の内部感覚に閉じた刺激へ向かい，それらが快の情動をもたらしていることを物語っている。すなわち，本児は父親とトランポリンを跳んでいるにもかかわらず，本児の内的状態は一人遊びの時と同じような様相を呈していたと思われるのである。つまり、本児のトランポリン遊びにおける快の情動は父親と共有することで生じてきたものではなく、自己に閉じた，いわば自己受容的な快の情動であると考えられる。

トランポリン遊びは身体の浮遊感のような自己受容感覚や、跳躍に随伴する外界の見えの変化といった視覚的経験などの感覚と跳躍運動の協応を楽しむものである。一般に、自閉症児においては、自己受容感覚と運動の随伴性は固執行動を生起しやすい。それではなぜ、一人でトランポリンに乗らずに、父親を誘うのであろうか。それは、本児が一人ではトランポリンの快を享受できず、父親の助けを借りなければ達成できないからである。つまり、本児は父親を道具的に利用することで自己の要求を達成していると言えるのである。本児は道具的な反応を求めて父親に接近している可能性が高いのである。その証拠に、自分ひとりで達成できる遊び、例えばペグさしや型はめなどに本児が興じている時に父親がその遊びに加わろうとする、嫌がり父親の手を払いのけたり、父親の介入を避けて、当該の遊具を持ったまま父親から離れた位置で再び遊びはじめるのである。

こうした現象は，トランポリンに限らず，表面上は父親と快の情動を共有していると思われる他の運動あそびにおいても同様であった。例えば、三輪車に本児が乗ったまま、父親に三輪車ごと空中を移動させてもらう「ET遊び」や「高い高い遊び」なども、父親と楽しさを共有した共同遊びを行っているわけではなく、常に父親を自己の要求を実現させるための道具として利用しているのであった。

この時期，本児は自己の要求を一人では実現できないときに父親に接近し、父親を道具として利用して要求の充足を行っていた。表面的には父親との共同遊びが成立しているように見える場面でも、実際は遊びの中心が本児の一人遊びで占められていたのである。本児と父親とのダイナミックな関わりとは対照的に，母親は父子の関わりを傍観的に眺めているだけであった。父親が都合でセッションに参加できない時（第２回）でも，母親は第１回と同様に本児に積極的に関わることはなく，本児の一人遊びを眺めているのみであった。したがって，第１回のセッションで本児の遊びを全面的に父親に依存しているように見えたのは，実は母親自身が本児と上手く遊

べないためであったことがわかった。ただ，ときどきではあるが，本児が父親との遊びに一段落して，ペグ差しや型はめなどの静的な遊びに興味を移して遊びはじめると母親も本児の側に座り込み関わりを持とうとする場面があった。そんな時でも母親は本児の気持ちを無視した強引な関わりをするのであった。たとえば，顔の形の型板はめの遊具に本児が挑戦している時に，母親は耳の部分の型板を取って，「これ何？」と尋ねる。本児はその型板を取り返そうとして手を伸ばすが，母親は渡そうとしない。本児が奇声をあげるに至って母親はようやくその型板を返すことになるが，その際にも「これは耳でしょう。耳」と言いながら型板を本児に渡した。さらに，「お母さんの耳はどれ？」「お耳はいくつある？」など，次々と質問を浴びせるが，本児は全く関心を示さず，応答しなかった。こうした場面は本児と母親が関わる数少ない場面で常に認められた。本児が関心を持って遊びはじめた遊具を取り上げて，無理矢理に母親の意図する関わり（たとえば，モノの名称の質問，モノの機能に基づいた遊びなど）へと導く，いわゆる母親主導の関わりはこの時期の母親の特徴であった。遊び場面における母親のこうした特徴は，この時期に散見された靴を履いたり，口を拭いたりといった本児の生活動作に言及する際の厳しい口調や態度の特徴と符合した。つまり，母親は生活動作を躾る時と基本的に同じ態度で，遊び場面においても本児の意図を無視した指示的，教示的な関わりに終始していたのである。本児の意を解さない母親の関わりに対して，本児は拒否反応を示すだけでなく，たとえば母親が介入してくると本児はそれまで遊んでいた遊具をもって母親から離れ，場所を変えて遊びはじめるといったように母親から逃避するようになった。こうした本児の行動がさらに母親の本児への志向性を萎えさせる結果となり，母親の関わりは一層希薄になった。

この時期では，本児は父親に接近し，母親から逃避もしくは回避するというように父母に対して全く逆の関わりを示した。しかしながら，両親に対する本児の関わりの本質は基本的に違いはないと見てよいであろう。なぜならば，本児と父親の遊びは先にも指摘したように，三項的関係によって遊びが両者で共有されているわけではなく，本児は自分一人ではその遊びを実現できないために父親をいわば道具として利用しているに過ぎず，基本的には本児の一人遊びに他ならないからである。愛着に裏打ちされた共同遊びが成立しているように見えた本児と父親の関わりも実は父親を道具的に利用した一人遊びに他ならないとすれば，本児の父親と母親に対する関わりは基本的に違いはないと考えられるのである。

第２期：心理的安全基地としての母親への愛着

第５回になると本児はこれまでと違って父親の誘いかけに応答しなくなり、一人遊びが多くなった。その結果、父子の運動遊びを中心とするダイナミックな関わりが次第に減少してきた。父親への接近行動が減少するにつれて、本児は母親を見る頻度が急激に増加した。セッション前の茶話会ではしきりに母親の腕を触ったり、母親の手で自分の口を拭いたりなど、以前は殆ど見られなかった母親への身体接触が増加してきた。父親の話によれば、以前は祖母の家に行くと祖母に接近することはあっても母親には殆ど関心を示さなかった本児が、最近は母親がそばにいないと常にその居場所を探すようになったとのことであった。母親の接し方が特にこの時期に変化した兆候は見当たらず、しかも両親の聞き取りからも本児の変化をもたらすような心当たりもないとのことから、この時期の本児の変容の背景を推測することは難しい.

セッションを重ねるにつれて、本児の母親

への接近行動はますます頻度が増加し、本児が不快な状態になったときは必ず母親に接近したり、不安になると母親を探してその存在を確認するような行動が出現するようになった。例えば、父親に叱られると母親の側に走り寄り、自分の好きな歌の一節を口ずさんで母親にその歌を歌って欲しいと要求した。母親が一通り歌い終わると、本児は安心したように母親から離れて再び一人遊びに没入した。以前は要求が阻止され不快になると洗面所に行き、手に石鹸をつけて洗う「手洗い」行動が頻発していた。不快になると「手洗い」というこだわり行動に逃げ込むことで、不快を払拭していた本児が、この頃になると愛着対象である母親にある行為を要求することで不快を快に転換できるようなった。不快や不安に遭遇すると快を求めて愛着対象に接近し、自己に快をもたらす行為を要求するという本児の行動は、別府（1994）が指摘した自閉症児における愛着の発達の第３段階に位置づけられる．別府(1994)によれば，この時期は行動や場面の背景に他者の意図や感情が存在することを覚知できるようになるとされている．ところが、本児の行動はこの段階に止まらず、愛着の質的な発達変化の過程で最も高い水準に位置づけられている関係、すなわち、不安や不快な場面に立ち向かう際の心理的安全基地として母親をみなした上での関わりに変貌を遂げていた（別府、1994の第４段階)。例えば、本児はこの時期、玩具棚の上がたいへん気に入っていた。玩具棚に上るとき本児は棚の２段目に足をかけると必ず後ろを振り返り、母親の存在を確かめていた。振り返って母親が見当たらないと本児はすぐに棚を降りて母親を探しはじめた。本児のこの行動は次のように考えられる。すなわち、玩具棚は約２メートル近い高さがあり、しかも棚に足をかけて登るため身体が不安定になる。おそらく、本児は２段目に登ったところで高さに伴うある種の不安を感じたのであろう。そして、その不安を払拭し、２段目から上に登るためにの勇気を得るために、母親の存在が必要になったのではないだろうか。このように考えれば、本児は母親を心理的安全基地とみなして関わっていることになり、愛着の質的な発達変化の過程で最も高い水準に達していると想定される。

こうした、本児の母親に対する愛着水準の高さとは裏腹に、本児の遊びは依然として一人遊びから広がりがみられず、本児は母親の介入を決して許容しなかった。そして、本児の一人遊びに母親が関わろうとすると、当該の遊び道具をもって母親から逃避するのであった。したがって、この時期においては，母子間に共同遊びは全く成立していなかった。本児にとって快適な状態は、母親による一人遊びへの介入がなく、自分の意のままに行動でき、しかも心理的安全基地としての母親が見える範囲にいることなのである。なぜ、こうした矛盾したような現象が起きるのであろうか。ひとつの解釈は、次のようなことである。すなわち、本児には母親への接近要求さらには共同遊びの要求は存在するものの、これまでの母親の不適切な対応によって形成された回避動因が同時に存在するため、一種の葛藤状態にあり、その表現形が前述した状態、すなわち母親の見える範囲での一人遊びになったと考えることである。先にも指摘したように母親は本児に対して常に指示的に関わり母親主導の遊びを押し付けるような関わりをしていたことから推すと、この解釈の妥当性を主張できる。小林（1999）も自閉症児の母子間に同様な状態が存在することを指摘し、この葛藤状態を動物行動学における接近・回避動因的葛藤（approach-avoidance motivational conflict）という言葉を用いて説明している。

一般に、自閉症児は一人遊びへの他者の関与を極端に嫌う傾向がある。中田（1984）が指摘した「自我の自由度の侵害」に対する極

端な抵抗がそれである。本事例においても基底にはこうした抵抗感が存在している可能性は否定できないが、高い水準の愛着行動との並存を考慮したとき、上述のようにその起源を母子の関係性に求めることは充分に妥当性を持つと思われる。

母親は本児の一人遊びに介入するたびに本児の拒否に合うので、次第に本児への働きかけ自体が減少してくる。その結果、本児は一人遊びに終始し、それを母親は少し離れた位置から見守るという状態が益々顕著になった。

第３期：遊びの対象としての母親への志向性の芽生え

前述したように，第２期になって本児は母親を心理的安全基地とした行動を示すようになったが，遊びの形態はいっこうに変化が見られず，相変わらず一人遊びに終始していた．本児の興味，関心から発した一人遊びであっても，それらはすぐにパターン化してしまうために，本児の遊びは展開が見られず広がりを欠いていた．したがって，本児は既に獲得されているパターン化した遊びを次から次へと渡り歩き，落ち着いて遊び込むことなかった．しかも，母親は本児のこの状態を改善しようと試みることもなく，ただ漫然と本児の一人遊びを傍観している状態であったため，本児と母親の関わりはほとんど見られなくなっていた．

そこで，第15回セッションにおいて、この状態を改善するために筆者は母親に対して以下の二つのアドバイスを行った。母親は本児の一人遊びを離れた場所から見ていることが多く、本児との間に距離があった。そこで、まず第一に、母親には常に本児の側にいることを心がけるようにとのアドバイスを行った。第二に、母親は本児の興味や関心とは無縁な母親主導の関わりに終始していたため、本児の視線が他方に向いているときに声かけしたり、本児の意向を無視して一方的に関わることがあった。そこで、母親に対して本児の興味や関心を尊重して、なおかつタイミングよく関わるように勧めた。

アドバイスの効果はすぐに次のセッション(第16回)で認められた。母親はこれまでと違って常に本児の側に寄り添って，本児の遊びの流れに沿った関わりができるようになった．本児の目を見ながら声かけをする場面や，本児が発する不明瞭な言葉を何とか理解しようと努めている場面など，これまでの母親とはまるで別人のような母親の変貌ぶりであった。結果として、本児の遊びそのものには本質的な変化はみられなかったものの、母親の適切で自然な関わりの為、母子の関係性に変化が見られるようになってきた．まず、第一に本児は母親が接近しても嫌がらなくなり、逃避傾向は完全に消失した。したがって、遊び場面で母子が一緒に居ることが多くなった。第２に、本児の視線が母親に向かう頻度が高まり、母親への志向性が高くなった。たとえば、母親がフープを使って縄跳びのような跳躍をしている様子を見て、本児もフープを持って母親と同じような行為をしてみるといったように、母親の行為の模倣が出現しはじめた。また、初歩的ではあるが、遊びのなかで母子のやり取りがみられるようになった。たとえば、シャボン玉遊びにおいて、本児が自分の吹き棒を母親に渡し、母親をシャボン玉遊びに誘う場面があった。このことは、本児が母親を遊びの対象として認識しはじめていることを示している。

母子関係における本児の遊びは、第１期における父子関係における本児の遊びと本質的に異なることは明らかである。すなわち、第１期においては本児は遊び場面における自己の要求を実現するために、いわば道具として父親を利用していたのに対して、本期では母親を遊びの対象として認識しているのである。

この頃になると，本児は父親の呼びかけにほとんど反応せず，父親が近づくと逃げるよ

うなった．何とか関わろうとする父親の働きかけが前面に出ると，その働きかけは指示的，教示的になってしまい，結果的に父親の主導性がますます本児の拒否反応を強めることになった．こうしたことをくり返すたびに，次第に父親の本児への働きかけは減少し，母親が都合で休んだ第18回セッションでは父親は本児の一人遊びを傍観的に眺めるだけになっていた．ここにきて父子関係と母子関係は全く逆転し，この時期の父子関係は第１期の母子関係そのものであった．

前述したように、筆者のアドバイスに従って、母親は本児へ積極的に関わるようになったため、本児の側に母親への志向性を引き出すことができた。しかしながら、母親の子どもへの関わりは、あくまでも筆者の具体的な関わり方のアドバイスに基づくものであった。それ故に、母親自身の意識に裏打ちされた関わり方になっていないために、セッションを重ねるにつれて母親の関わりは次第に硬直化し、第２０回を過ぎる頃から以前の母親へと戻りはじめた。母親のこうした変化は、ようやく芽生え始めた本児の母親への志向性を急速に萎ませることになり、結果的に本期の後半になって母子の関係性は再び冷え込むことになった。

第４期：母親の内面性への気づきとその内面性への働きかけ

第28回のセッション直後、母親は急病のため約１週間入院した。父親とのセッションを挟んで、約１ヵ月ぶりに行われた母子のセッションは、以前とは明らかに印象が異なっていた。すなわち、このときの母親は、これまでになく本児に積極的、かつ主体的に関わっていた。たとえば、これまでは本児がトランポリン上で楽しげに飛び跳ねている場面でも、笑顔で見守るだけであった母親が、このときに初めてトランポリンに上がり、本児と一緒に飛び跳ねて遊びはじめた。静的な関わりしかしなかった以前とはうって変わって、母親がトランポリンやボール遊びなどの運動遊びに積極的に関わりはじめたことから、母子の遊びがダイナミックに展開するようになった。また、本児が気に入っている絵本や縫いぐるみを自宅から持参して、遊びを工夫するなど、これまでにはみられなかった主体的な関与の姿勢を見せはじめた。

こうした母親の積極的かつ主体的な関わりに呼応するように本児の行動が母親への志向性を増してきた。たとえば、母親が読んでいる絵本に興味を示して近づいてきた本児に、母親が「座って」と指示すると、本児は手に持っていた玩具の木槌をわざわざ玩具棚に片付けてから母親の側に座り母親の顔を見上げた。本児の振舞い方から、絵本そのものに関する興味もさることながら、母親と一緒に絵本を見ることがうれしくて仕方ないといったわくわくした様子が感じられた。また、母親がフラフープや縄跳びをすると、すぐに本児もフラフープや縄を取って母親の動作を真似ようとした。以前から散発的にではあるが、摸倣行動は見られていたが、この時期になるとその頻度が増すとともに、モデルとしての母親の動作やモノの操作を注意深く観察する行動が顕著になってきた。最終的には、母親と同じような行動が成立しないために、不快感から摸倣をやめるだけでなく、母親からフラフープや縄を取り上げて母親の行動をもやめさせた。しかしながら、こうした事態に至るまでに、本児は以前と違って幾度となく母親の動作を見ては試してみるといったことをくり返した。母親と同じ事をしてみたいという本児の思いはここにきて益々強まってきた。こうした思いは、動作の摸倣に留まらず、心的な同化へと及ぶことになる。

この時期に、本児は細長いブロックを立てて、その上に乗って不安定な姿勢で何種類かのポーズをとることに強い興味を示していた。この遊びは次第にエスカレートして、ついに

はブロックを２段に重ねて、その上に乗ろうとしはじめた。本児はブロックを重ねた後で、側の靴箱に上りそこからブロックに乗り移ろうとするが、不安定なため移れない。母親が下から支えることによって、しゃがんだ姿勢でどうにかブロック上に移ることができた。その後、興味深い母子の関わりが観察された。しゃがんだ姿勢でブロックを手でつかむことによって辛うじて安定を維持していた本児は、その手を離して立ち上がろうと腰を上げ始めた。それを見た母親は不安な表情を浮かべて「怖いよ、お母さん怖い」と本児に言葉をかけると、すぐにしゃがんで前の姿勢に戻った。その後、何度か立ち上がろうとするが、そのたびに母親の不安な表情と言葉かけで元の姿勢に戻り、結局ブロックを降りてしまった。ところが、直後に行われた他者遊び場面においては、他者が母親とは違って不安な表情を見せず微笑んでいると、ブロック上で逡巡していた本児は安心したように立ち上がり、以前のようにポーズをとったり、天井に触ったり、楽しげな表情を示した。これらのことから、本児は相手となる他者の言葉かけや表情、仕草などからその人の情動を感じ取り、しかもその情動に自己が同化することで、安心を得て行動に移ることができるようになったと考えることができる。換言すれば、社会的参照が出現したことになる。

同様なことが次のような場面においても指摘できる。たとえば、マット上にうつ伏せになっている本児に対して、母親が「でんぐり返し」と声かけして前転を要求すると、本児はすぐにやりはじめた。はじめのうちは、上手くできずにいたが、そのうち上手くできるようになると、母親から表情豊かに賞賛の言葉をかけられた。母親が誉めると、本児はうれしそうに微笑んで、その後何度も前転を繰り返した。このことは母親の情動に自己が同化して、母子が情動を共有するということだけではなく、そのことを再現するために母親の内面に働きかけるといった本児の強い志向性を表している。

母親の内面に働きかけるという本児の志向性は、いよいよ明確になり、そのこと自体が遊びの様相を強く帯びてくるようになった。たとえば、熊の縫いぐるみを持ち、母親の方に向けて「ワンワン」と言う本児に対して、母親が「熊さんはワンワンいわないよ」と言うと、本児は笑いながら今度は声を大きくして「ワンワン」という。これに対して母親が微笑みながら「ワンワンじゃないでしょう」と言うと、いかにも母親の反応を期待するかのように「ニャンニャン」と応答した。この場面も本児は母親の情動に同化しつつ、しかも自らの働きかけ方による母親の応答の変化を期待するといった言葉のやり取り遊びを楽しんでいた。この時期に母子間の言葉のやり取りが活発になった１つの要因は、本児が母親の情動を感知し、それに自己の情動を同化させることによって、母親と情動を共有できる場面が増えてきたことによるものと考えられる。

本期は母親の入院を契機として、母子の関係が質的に転換した時期であった。
以前から、母親は第２子を切望していたが、この度の入院によって、この母親の望みが完全に絶たれてしまった。母親の悲しみは想像を絶するものであったと思われる。しかしながら、そうした経験が本児への積極的、主体的な関わりを生みだしたことは想像に難くない。母親は入院を契機として大きな意識変革を成し遂げたのではないだろうか。そのことが、母親の本児に対するかかわり方の変更をもたらし、引いては本児が母親の情動を内面化できるようなって母子関係の質的な転換をもたらしたのであろう。その意味で、この時期における母親の役割はきわめて大きいと言わなければならない。

第５期：自己の内面性への気づきと相補的関

係性の成立

本児はこれまで自己の鏡像に対して関心を示し、鏡を見ながら手や足を動かして、自己身体と鏡像の連動性を確かめたり、ズボンを脱いでお尻を映して確かめたりといった行動がたびたび認められた。ところが、この時期に入り、鏡像の関心が自己の身体およびその動きから、顔とりわけその表情に移ってきた。たとえば、手に持っている缶（びっくり箱のように中からスプリング製のヘビが飛び出す）のふたを開けようとするが、なかなか開けることができずにいると、たまたま鏡の中の自己像が目に入り、鏡に近寄る。そして、鏡に顔を近づけて、口元を見ながら「あかない、あかない、あかない」と低い声でいう。次に、高い声で「あ・か・な・い」と一音節づつ区切りながら、唇を誇張して発声する。今度は、その際の表情に関心を持ったのか、顔全体を見ながら「あかない、あかない、あかない」とそれぞれ異なった表情をしながら発声した。この時期、このように鏡の前で喜怒哀楽の表情を作り出しては眺めることが多くなった。ときには、鏡の前で幼稚園で習ったお遊戯を豊かな表情をともなって再現することもあった。この際にも本児は身体各部の振りを見るのではなく、常に自己の表情の変化を注視していた。

本児は本研究の観察を開始した時期には、先に指摘した鏡像と自己身体の連動性を楽しんだり、鏡を利用して身体の各部を確認するなどの行動は既に出現していた。したがって、かなり早い時期から本児は視覚的自己認知を成立させていたことが明らかである。しかしながら、本期においてさえも本児は鏡の自己像を見て「恥らう」とか「ふざける」といった素振りをまったく示さなかった。Dawson & Mckissick (1984) が指摘したように、本児も同様に視覚的自己認知は可能であるものの、自己を意識した行動を表さないという自閉症児に共通する特性を示した。

こうした自閉症児に共通してみられる鏡像反応の特徴に加えて、本期において特徴的に見られるようになった鏡像反応が、顔への注目、とりわけ表情の変化への意識の集中であった。百合本（1980）は自閉症児の対鏡行動を、自分の全身像を見て、身体を動かしたり、姿勢や仕草を変化させる行動が顕著な「全身型」と、とりわけ顔の部分に注目し、表情の変化を映して見る行動が顕著な「顔型」に分類した。その上で、自閉症状が軽減するにつれて、「全身型」は「顔型」へ、「顔型」は「全身型」へと変化することから、自閉症児が示す対鏡行動の型の変化が自閉症状の軽減の目安となると述べている。この枠組みに従えば、本児はまさに「全身型」から「顔型」への変化を本期に遂げていることになる。

さらに、本期は母子の関係が飛躍的に改善する時期でもあり、後述するようにその主たる原因が本児の側に存在することから、百合本（1980）の指摘は妥当性が高いと言えるかもしれない。

以前に、本児は鏡の前で泣き真似をしていて、そのうち本当に涙を流して泣いてしまったことがあった。両手を眼の下で左右に動かして「エン、エン、エン」と声を出す「泣きの行為」を見ることによって、内的な悲しみの感情が喚起されたわけである。このような経験は、本児に自己の表情と情動の関係を気づかせることになったのかもしれない。こうした経験の積み重ねを通して、本期になって鏡の前で喜怒哀楽の表情を楽しんだり、表情豊かにお遊戯の振りを再現するといった行動にみられるように、本児は自己の表情と情動を表象の水準で理解できるようになったのであろう。また、第４期でみられた母親の内面への気づきが、本期における自己の表情と情動の表象的理解を促した可能性も考えられるであろう。

上述したように、本児が示す鏡像反応の分析から，本児が母親と自己の内的状態、とり

わけ情動の状態について理解できるようになったことが明らかになった。このことは母子の関係のありように大きな影響を及ぼした。たとえば、本児は要求を阻止されると以前であれば、すぐにあきらめたり、要求阻止による不快感を払拭するために手を洗うという固執行動に入り込んだりしていた。しかし、この時期になると母親の手を引っ張ったり、母親に向かって不快な声を出したり、時には甘えるような声を出して要求を持続させた。つまり、自己の要求を達成するために、母親という行為主体の内面に働きかけるような行動が見られるようになった。また、第４期までは本児は三輪車やフラフープなど自分が遊びの道具としているものを母親が操作しようとすると、不快な声をあげてそれらを取り上げようとした。不快な声を出しながら近づいてくる本児に母親は持っているフラフープを差し出しても、本児は受け取ろうとはしなかった。本児はフラフープに固執しているのではなく、母親の行為そのものを止めさせようとしていたのである。おそらく、本児は自分が「する人」、母親は「見る人」という固定化した一方向的な関係でしか自己と母親の関係を捉えていなかったために、それが一旦崩れると不快になり拒否反応が出現したのであろう。ところが、本期になると、こうした一方向的な関係がほとんど消失し、母子間の双方向的な関係性が見られるようになってきた。したがって、遊びにおける役割交代が可能となり、母子の共同遊びが展開するようになった。こうした母親と自己の相補的な関係性の把握も、本期までに可能となった母親と自己の内的状態、とりわけ情動状態の理解によって裏打ちされているものと思われる。

さらに、限られた場面ではあるが、自己と母親の要求を磨り合わせて、その場に適応的な行動を選択することもできるようになった。たとえば、父親との遊びの中でよく出現したUFO遊び（靴箱の上に置いた三輪車に本児が乗り、本児が乗ったままその三輪車を父親が抱えて、部屋を一周する）を母親に要求しようとして、本児は三輪車を抱えて靴箱の上に載せようとした。それを見た母親は、三輪車を持上げられないのでその遊びをできないことを告げ、本児をトランポリン遊びに誘った。こうした事態において、以前であれば本児は不快になり、情緒反応を伴ないながら要求をさらに強めるのが常であった。しかし、この時期になるとそうした行動は消失した。本児は抱えていた三輪車を床に下ろして、母親と一緒にトランポリン遊びをはじめた。つまり、本児は母親が三輪車を持上げられないことを知ったうえで、自己の要求を抑制して母親の要求に従うことができたのである。こうした母親と自己の要求の磨り合わせおよび調整は、母親と自己の内的状態の的確な理解を基盤として成立しているものと考えられる。

本期は母子の相互作用がきわめて良好に推移した時期であった。この背景には先に指摘したように、本児が母親の内的状態の理解に加えて、本児自らの内的状態を理解できるようになったことが作用している。しかしながら、この時期の母子の良好な関係は母子の二者関係に閉じており、母親以外の他者に対しては以前に比べて大きな変化は認められなかった。つまり、母親に対して生じた内面性の理解が母親以外の他者については生起せず、したがって他者関係の改善をもたらさなかったということである。先述したように本児の鏡像反応には自己意識行動が出現しなかった。このことは、他者が自己の鏡像を見たときに感じる心の内容を本児は理解していないことに起因している可能性がある。だとすれば、この時期における母子関係の成立は、本児における他者の表象的理解に裏打ちされて実現しているのではないのかもしれない。

第６期：環境変化による情緒的不安定

本期は良好な母子関係が展開された第５期

とは様相が一変し、母子の関わりが極端に減少した。本児はモノの操作を中心とする一人遊びに終始し、母親の呼びかけにも応答しないことが多くなった。さらに、突然奇声をあげたり、窓の格子に上って無表情で室外を眺めたり、何の脈絡なく突然部屋から外に出たりといった、これまでには見られなかった不安定な行動が出現した。また、この時期には情緒的に不安定になったときに見られる特有な行動も出現した。それらは、突然眩しそうに手で眼を覆ったり、場合によっては部屋の照明を消したり、あるいは、トランポリンの下の暗がりにもぐり込み暫くじっとしているなど視覚的刺激を遮蔽するような行動であった。おそらく、こうした行動は本児の知覚過敏に基づく一種の防御反応であろうと思われる。母親の関わり方がこの時期に特に変化した様子はなく、以前と同様に積極的な働きかけを行っていることから、本期における母子の関係性を阻害した主たる要因は、本児の不安定な行動や知覚過敏に基づく特有な行動にあると推察される。

母子の共同遊びは成立し難いものの、本児の母親への愛着行動は以前と変わりなく、確固とした愛着関係が存在していた。たとえば、本児が不安定になり部屋から出ようとするときにも母親の手を取り、一緒に出るように促したり、本児の奇声を止めさせようとする母親の働きかけに応じて、手で口を覆いながら声を出すといった行動が見られた。また、これまでには見られなかった「おんぶ」や「抱っこ」の要求が出現し、母親に「おんぶ」をしてもらっているときに鏡に映る姿を見ながら自ら「赤ちゃん」と言った。本児のこうした行動から、特にこの時期は今までにも増して母親への愛着が強固になっていることを覗わせる。

母子の愛着に揺るぎがなく、しかも母親はこれまで通り適切に関わりを持っているにも拘わらず、本児が精神的に不安定な状態に陥っていることからすると、その原因を母子の関係性に求めることはできない。考えられることは、この時期の本児を取り巻く大きな環境の変化である。この時期の初頭は、本児が幼稚園を卒園し、養護学校に入学した頃であった。自宅から歩いて通っていた幼稚園が、スクールバスで約1時間かけて通う養護学校にかわって、通学方法をはじめ多くの環境が劇的に変化した。養護学校の生活への切り替えは表面上、比較的順調に行われているように思われたが、母親によれば本児は毎日かなり疲れて帰宅するとのことであった。本児の情緒的な不安定性は夏休み明けの最終のセッションまで軽快する兆しがみられなかった。自閉症児の情緒的不安定性の背景には、生理的・生物学的な発達要因も想定されており、本児の情緒的不安定性の原因を環境要因だけに求めることはできないのは勿論である。しかしながら、この時期の劇的な環境変化は本児にとって大きなストレス要因になっていたことは確かである。

本期においては母子の相互交流遊びは乏しいにもかかわらず、本児の認知的な機能は着実に充実した。本児はこれまで母親との間で特定の意味を指示する協約的な言葉が形成されていれば、その言葉を使って母親にモノや行動を要求することができていた。さらに、母親との間で協約的な言葉が存在しないモノや行動を要求する場合は、本児はハンドリングやクレーン行動によって要求を母親に伝達していた。ところが、本期になると本児は目線で要求を果たそうとする素振りをみせはじめた。たとえば、本児は三輪車を母親に押してもらいたいときに、母親の方を見つめた。母親は本児の意図に気づいて、すぐに三輪車を押してあげた。本児は視線を使って母親に要求を伝達できたことになる。このことから、本児は視線が母親の内的状態に及ぼす効果を理解していたことがわかる。本児の認知能力の向上に伴なって、高水準でなおかつ多様な

要求行動が遂行されるようになった。

また、本児は他者を欺くような行為をみせた。これまで本児は遊び場面を収録中のビデオカメラに関心を示したことはほとんどなかった。ところがこの時期になると、ビデオカメラに興味を示し、撮影者からカメラを取り上げようと手を伸ばすことが多くなった。本児はカメラに手を出しても撮影者にことごとく振り払われてしまうので、要求を実現することができなかった。そのときに実に興味ある行動が出現した。本児はカメラを一瞥した後、撮影者の傍にあるロッカーに上りカメラには興味ないような素振りで窓の外を見ながら鼻歌を歌いはじめた。カメラマンが気を許した隙に本児は俊敏に手を伸ばし、カメラを手にすることができた。本児はカメラマンに自己の意図を悟られないようにするために、意図とは異なる振りをしてカメラマンを欺いたことになる。本児における欺き行動は対象や他者を代えてたびたび見受けられたことから、本児は明らかに意図して欺いているといえるであろう。自己の行動が他者の内的状態に与える影響を予想できなければ、欺き行為は成立しない。それゆえ、欺き行為の出現は「心の理論」の獲得を前提としている。この枠組みに照らしてみると、本児は既に「心の理論」を獲得していたのかもしれない。

母子の相互作用場面が少ない本期においても、シャボン玉遊びだけは特別であり、母子の情動共有が成立した。本児は頭上に広がる多くのシャボン玉を嬉々として眺め、そしてそれらを指差すと同時に母親の方に顔を向けて「シャボン玉，シャボン玉」「たくさん」と言いながら感動を母親と共有した。指はシャボン玉を指し、視線は母親に向けられるという、いわゆる二方向的な叙述の指差しは、本児の社会的認知能力が一定の水準に達していることを示唆している。

本期は環境変化に起因すると思われる本児の精神的な不安定性の要因によって、母子の関係性が低調に推移した時期である。しかしながら、本児の認知能力は着実に発達を遂げた。この時期における本児の認知発達の１つの大きな促進要因として学校生活における多様な経験があげられる。学校生活は本児にとってストレス要因として作用し、情緒の不安定性をもたらす，いわば負の要因であると同時に、多様性のある豊かな経験の蓄積をもたらし、認知的発達を促進させる正の要因としても作用する。本期にみられた本児のアンビバレントな行動特徴については、こうした解釈も妥当性を持つのではないだろうか。

２．鏡像反応

１）本児の鏡像反応の全体的特徴

全50回のセッション中に出現した延べ795回の鏡像反応を予め設定したカテゴリーに分類した結果が図１である。各カテゴリーごとに鏡像反応の延べ数が示されている。玩具や遊具などのモノを操作している時に鏡像を見る「モノの操作」と、意図した動作を再現している時に鏡像を見る「意図的動作」の合計は全体の７割近くを占めており、自己の運動・動作を意識しているときに鏡像反応が多く出現することがわかる。また、母親の鏡像を見る「他者」のカテゴリー頻度が極端に低い。

一般に自閉症児は他者に視線を向けることは少ないと言われており、同様に本児も他者を凝視することはきわめて少なかった。しかしながら、母親に対してだけは例外であり、

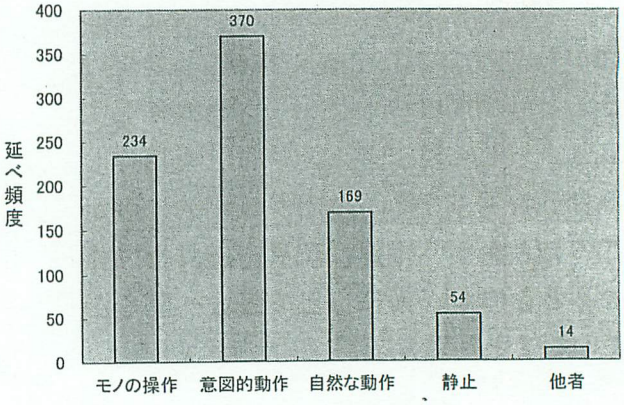

図１　各鏡像反応の延べ頻度

本児は要求行動や情動の共有の際にしばしば母親へ視線を向けていた。ところが、その本児が母親の鏡像を見ることはほとんどなかった。鏡面に向かっている本児に母親が声をかけると、自己の視野内に母親の鏡像があったとしても、それには一瞥もせずに振り返って生身の母親に視線を向けた。こうした傾向は母親に限らず母親以外の他者に対しても同様であった。本児は他者の鏡像にはほとんど関心を示さなかった。

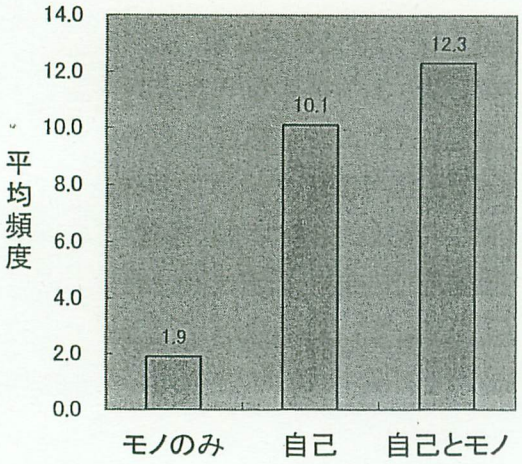

図２　「モノの操作」の内訳

図２は「モノの操作」を３つの下位カテゴリーに分けて、それぞれの平均頻度を示したものである。それぞれの下位カテゴリーは次のとおりであった。すなわち、本児が玩具や遊具を操作している時に、モノの鏡像だけを見ている「モノのみ」、モノと操作している自分の両方の鏡像を見ている「モノと自分」、そしてモノを操作している自分の鏡像だけを見ている「自分のみ」の３カテゴリーであった。図から明らかなように、モノの鏡像だけをみることは極端に少なく、モノを操作している自分，もしくはモノとそのモノを操作している自分の両方をみることが圧倒的に多かった。このことから、本児は玩具や遊具を操作しているときにも、常に自己の鏡像へ関心が向いていることがわかる。

図１および図２の結果から、本児は自己の鏡像に関心が強く、自己以外の他者やその他のモノへはほとんど注目しないことが明らかになった。本児にとって鏡はまさに自己を映して見るためにだけ用いられる、特殊化された機能を持つものとして認識されているように思われた。

２）親子関係の変遷と鏡像反応の関連

本児の鏡像反応と親子関係の質的変化が関連性を持つかどうか、関連性があるとすればどのようなものであるかを明らかにするために、先に指摘した親子関係の６つの時期ごとに鏡像反応の性質を検討した。

図３は親子関係の６つの時期ごとに１セッションあたりの鏡像反応の平均出現頻度を示したものである。第１期と第５期，第６期において鏡像の出現頻度が高いことがわかる。第５期は、本児が母親の内的状態の理解に加えて、自らの内的状態を理解できるようになったために、親子の相互作用がきわめて良好に推移した時期であった。第４期から第５期にかけて、本児の鏡像反応が急増したのはこうした親子関係の特性を反映している可能性が想定される。しかしながら、自己の要求を実現するために父親を道具的に利用するような関わりしかみられなかった第１期においても、第５期や第６期と同程度の鏡像反応が出

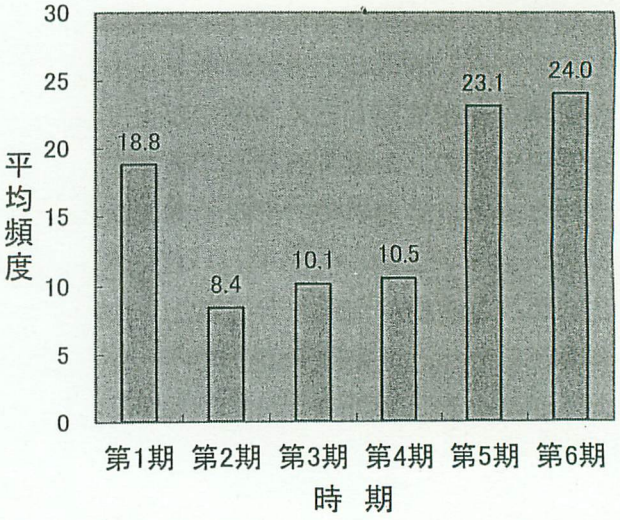

図３　時期別の鏡像反応

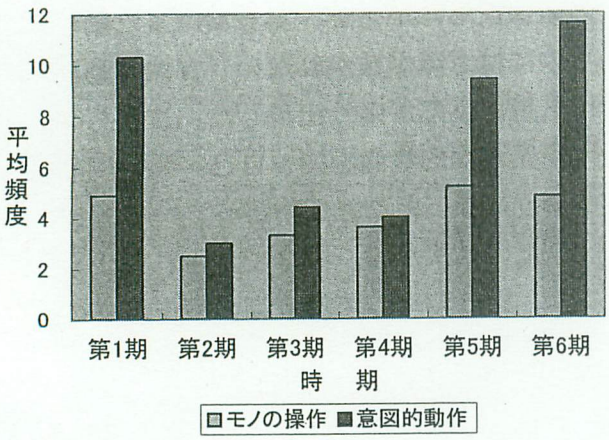

図４　「モノの操作」と「意図的動作」

現していることから、必ずしも一義的に親子関係と鏡像反応の関連を指摘することはできない。そこで、それぞれの時期ごとに鏡像反応の内容を検討してみた。

図４は動作を意識した時に出現する鏡像反応、すなわち「モノの操作」と「意図的動作」を時期ごとに示したものである。「モノの操作」は第１期、第５期そして第６期でやや高い傾向にあるが、それにも増してこれらの時期の「意図的動作」の高頻度が顕著である。したがって、図３における第１期，第５期そして第６期の高い出現頻度は「意図的動作」の頻度を反映していたことがわかる。そこで、「意図的動作」の具体的な内容について分析を試みた。

図５は第１期、第５期そして第６期について、「意図的動作」の鏡像反応を４つのカテゴリーに分けて表したものである。トランポリンや滑り台遊びなどの身体運動を行っているときに、自己の身体の動きに注目して鏡像を見る「運動・動作」カテゴリーの出現率は、第１期が最も高く、ついで第５期、そして第６期では最も低くわずか 10 パーセント余りであった。他方、喜怒哀楽の表情に注目する「情動表現」は「運動・動作」とは逆に第１期の出現率は少なく、第５期と第６期で多くなった。第１期では父親との運動遊びが多く成立するものの、三項的共有関係によって父親と遊びが共有されていないために、本児の運動遊びは一人遊びの様相を呈していた。それ故、この時期においては、父親を道具的に利用して実現した特定の運動・動作や、父親主導による他律的な運動・動作によって誘発された鏡像反応が多かった。ところが、第５期になると、本児が母親の内的状態を理解できるようになったことから、母親との共同遊びが成立するようになった。したがって、この時期における「運動・動作」は母親との情動の共有に基づく共同遊びの最中に出現した鏡像反応であった。さらに、この時期には母親の内面を理解し，それに働きかけることができるようになっただけでなく、自己の内的状態への気づきが出現しはじめる。このことが、本児の鏡像反応に端的に現れている。すなわち、喜怒哀楽の表情を意図的に再現してはそれを鏡像で確認するといった「情動表現」の出現率が高くなっている。この傾向は次の第６期になると一層顕著になった。第６期の「情動表現」は意図的動作の６割に達した。なお、この時期の「運動･動作」の出現率が低いのは、「情動表現」の頻度が増加したことだけではなく、本児を取り巻く環境変化によっ

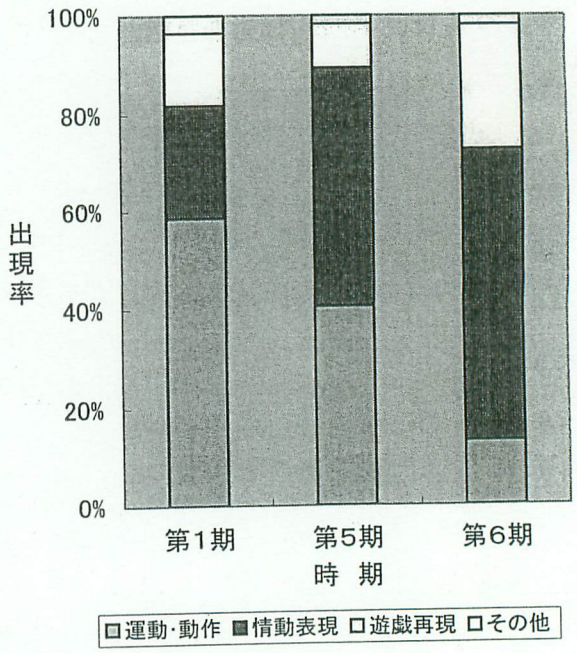

図５　「意図的動作の内訳」

て本児が情緒的に不安定になり、結果として母子の共同遊びが減少したことによる可能性も想定される。いずれにしても、意図的動作の内容は「運動・動作」の出現率が高い第１期と「情動表現」の出現率が高い第５期、第６期とは著しく異なっており、しかも、その差異は本児と母親の関係性の質的な違いを明確に反映しているといえる。

自己の運動や動作を意識した際に鏡像を注視する「意図的動作」や「モノの操作」とは対照的に、歩いたり，走ったり、立ち上がったりなど、動作そのものに意識が注がれない「自然な動作」時の鏡像反応の出現頻度をそれぞれの時期ごとに示したものが図６である。第１期から第４期までは出現頻度が低いのに対して、第５期と第６期で高くなっていることがわかる。第５期と第６期に多く出現した「自然な動作」は、鏡の前を歩いたり走ったりして通過するときに自己の鏡像を注視する鏡像反応であった。また、鏡から遠い位置にある滑り台の上に立っているときでも、同様な鏡像反応が出現した。第５期は自己の内的状態に気づく時期であった．前述したように、第５期は本児が喜怒哀楽の表情を意図的に再現する鏡像反応を頻繁に示した時期であった。このように自己の内的状態を意識した動作への鏡像反応に加えて、第５期はまた動作そのものには意識が注がれない「自然な動作」時にも鏡像反応が多く出現した。これらの事実は本児が内的状態を持つ自己へ強い関心を持つようになったことを物語っている。

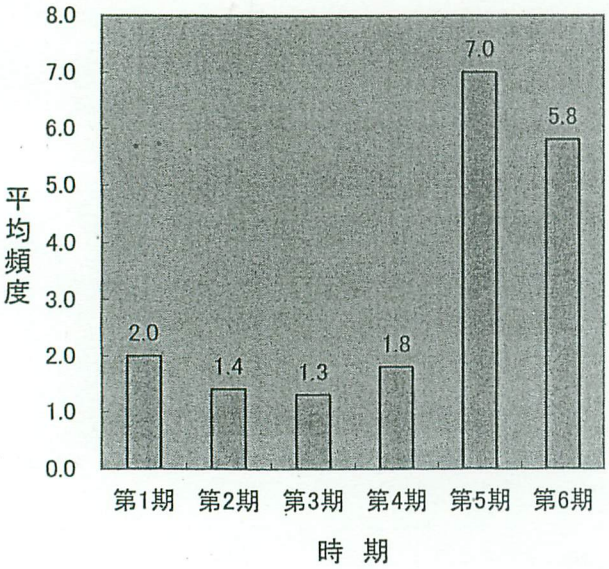

図６　「自然な動作」

以上の結果から、図３で示されたように第１期、第５期そして第６期の鏡像反応の頻度が同様に高い値を示しているものの、その質的背景は第１期と第５期、第６期では明確に異なっていることが明らかになった。すなわち、第１期，第５期そして第６期のそれぞれの時期において、「意図的動作」の頻度が他の時期に比べて高く、これらの時期の全体的な頻度の高さは「意図的動作」の頻度を反映していた。しかしながら、「意図的動作」の内容は、第１期では情動の共有を伴なわない他律的な動作への鏡像反応であったのに対して、第５期と第６期においては母親との情動の共有を基盤とする共同遊びの最中に出現した喜怒哀楽の表情への鏡像反応であった。このように、第１期と第５期、第６期は鏡像反応の出現頻度という量的尺度では差は認められなかったが、鏡像反応の質においては明瞭な違いが存在した。また、第５期と第６期では「意図的動作」に加えて、「自然な動作」時においても自己像への鏡像反応が出現しており、これらの時期における自己への関心の高さを反映していた。このように、それぞれの時期の鏡像反応は、親子の関係性の質的な変遷を如実に投影していることが明らかになった。自閉症児が示す鏡像反応は自己意識の発達を表すだけではなく、他者理解の水準や他者関係の様相をも反映するといえる。このことを敷衍すれば、自閉症児が示す鏡像反応の特徴を分析することによって、対人関係の様相を予測できる可能性が出てくるかもしれない。

謝　辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました対象児のミカちゃん（仮名）とご両親に厚く御礼を申し上げます。ミカちゃんの健やかな成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

麻生 武（1980）．身ぶりからことばへ ― 赤ちゃんにみる私たちの起源 ― 新曜社

Baron-Cohen S., Leslie A.M., & Frith U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind" ? Cognition, 21, 37-46.

別府 哲(1994)．話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成，教育心理学研究，42, 156-166.

別府　哲（2000）．自閉症幼児における鏡像認知　発達障害研究, 第22巻, 第3号, 210-218.

Caps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. Development and Psychopathology, 6, 249-261.

Dawson, G., & Mckissick, F. C. (1984). Self-recognition in autistic children. Journal of Autism and Developmental Disorders, 14, 383-394.

Gallup, G. G. (1968). Mirror image stimulation. Psychological Bulletin, 1968, 70, 782-793.

Gallup, G. G. (1970). Chimpanzees; self-recognition. Science, 1970, 167, 86-87.

Gallup, G. G. (1977). Self-recognition in primates; A comparative approach to the bidirectional properties of consciousness. American Psychologist, 32, 329-338.

神園幸郎（2000）．自閉症児における愛着の形成過程　― 母親以外の特定の他者との関係において ―．琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第２号，1-16.

神園幸郎（2001）．自閉症児にみられる対人関係の逆転．琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第３号，15-36.

Kanner (1943). Autistic disturbances of affective contact. Nervous Child, 2, 217-250.

小林隆児（1999）．自閉症の発達精神病理と治療．岩崎学術出版社. 160-161.

中田基昭（1984）．重症心身障害児の教育方法 ― 現象学に基づく経験構造の ―．東京大学出版会，335-338.

Newman, C., J., & Hill, S. D. (1978).

Self-recognition and stimulu preference in autistic children Developmental Psychology, 11,571-578

野村東助 (1992). 自閉症児における社会的障害 野村東助・伊藤英夫・伊藤良子 (編) 自閉症児の言語指導 , 1-18, 学苑社.

Rogers, S., Ozonoff, S., Maslin-Cole, C (1991). A comparative study o attachment behavior in young childrer with autism or other psychiatric disorders. Journal of Child anc Adolescent Psychiatry, 3, 1274-1282.

Rogers, S., Ozonoff, S., Maslin-Cole, C. (1993). Developmental aspects of attachment behavior in young children with pervasive developmental disorders. Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 30, 483-488.

piro, T., Sherman, M., Calamari, G., & Kotch, D. (1987). Attachment in Autism and other developmental disorders. Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 226, 485-590.

ıan, M., & Ungerer J. (1984). Attachment behavior in autistic children. Journal of Autism and Developmental Disorders, 14, 231-244.

er, D. & Ricks, M. (1984). Visual-recognition in autistic children; Developmental relationship. Child Development, 55, 214-225.

雅子 (1999). 自閉症児の初期発達 — 発達臨床的理解と援助 — ミネルヴァ書房、 129-157.

本仁子 (1980). 自閉症と鏡 現代のエスプリ 155「鏡と人間の心理」, 至文堂, .90-200.